

行ってもらい事情を説明した。憲兵隊では、入隊が遅れているので直ちに入隊となるであろうからと、入浴させてくれ一晚宿泊させてくれたので、ゆっくりすることができた。召集の初年兵であるが、支那事変論功行賞により勲八等瑞宝賞を受賞していたことが幸いしたのかもしれないと思う。軍人の時より軍属の時の方が命がけのお務めであったが、戦争末期の内地の軍人には不安と悲愴感があつたと思われる。

## 中支戦線従軍記

愛媛県 相原 明

私は昭和十七年徴集の現役兵として昭和十七年十二月一日高知市の西部第三十四部隊へ入営しました。郷里の自宅を前日の十一月三十日三人の仲間と早朝出発。見送りなどは禁止でしたので、激励や答辞、軍歌の高唱、万歳もなく、静かに国鉄壬生川駅より乗車、高知で宿に一泊。

徴兵検査は故郷で受けました。当初は第一乙種合格でしたが、間もなく改めて甲種合格との変更通知がきました。さて、入営当時の私の家庭は、

父 死去

母 健在 農業（水田一町四反歩）

長兄 〃 〃

次兄 〃 郡農会へ勤務

三兄 〃 洋服仕立

本人 〃 大丸百貨店東京本店へ勤務

弟 〃 住友化学新居浜工場へ勤務

長姉 〃 他家へ嫁入り

次姉 〃 〃

三姉 〃 〃

妹 〃 今治市国際ホテル勤務

と兄弟姉妹九人と賑やかで、私も心配なく兵役に服することができました。

高知の部隊へ入営して十七日目に野戦（中支）へ出発しました。その短い間、三種混合の接種やら兵器、被服、食糧の受給やらと目まぐるしい間を見て、東京

相撲（ちょうど高知市へ地方巡業に来ていた）の見物があり、有名な横綱玉錦、安芸海、前田山らの力士を見て楽しみました。軍隊とは恐ろしい所との予想と違い、やさしい親心の厚い所だなと感じたものです。

いよいよ内地を出発して外地へ行くその日、郷里の長兄がボタモチを持って面会に来ました。坂出駅のホームで予期せぬこととびつくりするやら嬉しいやらでした。当方より知らせぬのにどうして分かったのかと聞けば、「入営前日に投宿した、はりまや旅館より御親切に知らせてくれた」とのこと。高知の人はえろろ親切なことよと、戦友と語り合いました。

部隊は人員のみでなく、馬匹の輸送もありました。

馬は岸壁で腹へ筵を巻いてワイヤーで吊り上げる。宙に浮くと不安で四本の脚を掻き動かす。生まれて初めて見る光景でした。やがて馬は船倉の一番底へ乗せられる。人は下方より順次上方へと蚕棚へ過密なんて言葉では不十分な一平方メートルに三人以上詰め込まれ人体と兵器被服食糧などすべて一緒。天井の低い暑い汗のよく出る悪臭の強い居住区間である。上衣はすぐ

脱ぐ。輸送指揮班の軍曹殿が、「北滿の酷寒の地で食事も十分でない戦地のことを思えば、少々暑くても寝る所も三度の食事も保証されておる現状は極楽じゃ。長い間じゃない。短い期間じゃ。作戦や討伐に行くともっともつと苦しいぞ」と。

結局は、

高知（十七年十二月十八日発）（列車）

坂出（十七年十二月十八日発）（船舶）

尾道（列車）―下関（船舶）―釜山（列車）

―蒲口（船舶）―南京（十七年十二月二十七日着）

（船舶）―武昌（列車）

―趙李橋（十八年一月八日着）

のコースで、十二月十八日より一月八日まで延べ二十二日の日程でした。転属先は中支温品大隊三谷隊（第四十師団第二三六連隊第一大隊第三MG隊）。

中支戦線では、教育訓練と実戦の混合した状況である。内地とは異なり敵地である。駐屯地とは言え、敵は必ずしも良いとは言えない。緊張と覚悟の毎日である。

「わが鯨兵団は中支の第十一軍の中では、最強のしかも土佐連隊は最精鋭である」と教官、助教、助手から毎日耳にタコが出来くるくらい気合を入れられる。

夜間消灯、就寝中に突然の非常呼集で武装して警戒立哨も回数が多かった。初年兵は兵舎の内外に止まり、古兵以上が出動する。特筆する程の事故、損害もなく一応は何事もなく月日は流れていく。一等兵に、上等兵に進級しても次の初年兵が着隊するまでは、万年初年兵。とにかく小忙しい。

大陸的気候か寒暑の差が大きい。武漢三鎮では夏の落雀の候とも言われる。悪い水質、皮膚病、マラリアと敵でない気候風土との果てしない戦いに没入する。

私はMG中隊の大隊砲隊で馬を連れている。同じ歩兵同志でも一般の小銃中隊の者が羨ましい。行軍中の小休止。私たちはまず水囊を下げて水を求める。水が近ければよいが、遠いと水を持って走って帰り、馬に水を飲ます途中で、はや「出発」とくる。やれんなー馬の世話も十分できぬ。まして人の休憩などは。馬のお陰で乗することもあるが、プラス・マイナスすると

マイナスの方が多い。

失敗談を一つ。討伐に出て大休止。夜間、眠り込んで取り残された。不安と心細さは募る一方。大地に耳をつけてよく物音をさぐる。やっと微かな馬蹄の響きが感知された。慎重に方角を聞きわけて、一日散に走りや々と部隊に追いついた。やれやれ、敵の餌食をまぬがれた。戦友も分隊長も疲れが重なり、夜間の暗闇では注意力も散漫になる。個人個人が自分で注意する以外ない。厳しい戦場の掟である。話によると数時間も経た後、戦友が気付いて後戻りして探すと、無惨にも丸裸にされた死体が転がっていたとか。その例も少なくない由。昭和十九年五月ころの私の恥ずかしい失敗の一つである。

教育期間中で最も苦しんだのは大隊砲の分解搬送である。平生は馬に駄載して運ぶが、いざとなると分解して砲身（三〇キロの重さ）、脚、車輪等に分かれる。それを肩に載せて前傾姿勢で少しでも身長を低く保ち膝を曲げて走る。やって見れば分かる。地獄だ。それと私は弾薬手を命じられた。大隊砲の弾丸二発を木箱

に詰めてある。木箱に引きずりやすいようにバンドを肘にかけて匍匐前進する。やると分かる。苦しかった。

その中に十九年の夏、補充兵が着隊した。年長者ばかり、どうか万年初年兵の苦勞から解放された。順繰りとは言え、年長の補充兵も時には男泣きに涙を流し、戦地の厳しい条件に慣れるよう、死に物狂いで耐え忍んだことは私たちにもよく理解できる。

大陸での野菜と言えば、湖北省では玉葱、ニンニクが広い広い畑にできている。よく利用した。特にニラは下痢によいとのこと、また私は酒が強いので現地チャンチュウにニラを入れ、マツチの火で一度ポツといわせてはよく飲んだ。助かった。

次に少し変わった話です。私は恐縮ですが痔(切れ痔)が悪くて、寒い時は特に苦しみました。そのためよく入院を繰り返しました。中隊では成績の悪い病兵との評価だったのでしよう。十二人くらい転属で放り出されました。

行く先は同じ湖北省内の名前もあまり聞かない所の部隊でした。三月十日の陸軍記念日のこと。隊内では

めでたい日なので御馳走で祝いました。突然爆音があり、「今日は飛行機もお祝いに来たのか」なんて口走り、戸外で上をむいて日の丸や手を振り歓迎しました。ところが、あにはからんや敵機でした。慌てふためいて室内や地形地物を利用して頭を突っ込んで逃げました。でも悲しいことに七人の犠牲が出ました。致し方なし。防空監視の不手際ということ、それ以後、防空哨の確立強化に努めました。しかし、戦友の屍体処理がありました。

現地住民から薪を分けてもらい井桁に組んだ上に戦友をのせて、油を注ぎながらの火葬です。二、三日は飯が喉を通りませんでした。目に耳に鼻に残る悪いあと。体験者でないと分かりません。

制空権が大半敵に握られるようになりました。糧秣輸送です。積込み作業は苦力クワリです。日本兵は武装して監視警備。突然敵機来襲。投下した爆弾が広場に集積したドラム缶に命中。大変だ。ドラム缶が次々と爆発。誘発して手が付けられない。黒煙は天に沖す大火災。

炎熱の圏外へ退避するのが精いっぱい。付近のトラッ

ク多数、糧秣、その他の物資はすべて灰燼に帰した。メイユウファーズ。

転属先の隊には島根県人が多かった。最終的には一緒に仙崎港（山口県）へ戻った。その隊でも私は大隊砲の要員でいろいろと苦勞をした。回想すると「よくまあ生きて帰れたものよ」の感ひしひし。ここでも上等兵ながら方年初年兵。我ながら御苦勞さんです。この隊の中隊長さんは年老いた石川大尉さん。この隊長の若い当番兵が頭に流れ弾を受けて即死した。自分の世話をよくしてくれた若い当番兵の死体に、隊長さんは涙を流して泣きながら「若い命を勿体無い。年老いた自分が代わってやり度い」と茫然としていた姿を忘れない。この部隊は兵舎も満足に揃ってない貧弱なひなびた場所にいました。小さい難民区の現地人のショウハイ（子供）がよく鰻頭を売りに来るので、鉄条網越しにこちらの物資とよく交換をした。こうして戦雲の合間の無聊むようをまぎらわしたこともある。

ようやく終戦の時が来た。

昭和二十年八月十八日の朝の点呼後、八月十五日を

もつての終戦を知らされる。「停戦協定を結んだ。今のままで大人しくしておれ」とのこと。

夜になると、闇を利用して武器弾薬を揚子江に投棄した。服や靴は今まで自分の身を服や靴に合わせられていたが、終戦以後やっとなべてが身に合うようになって感慨深い。全部新品に代わった。終戦とは「まあ、とにかく弾丸はこない。食事は良くなる。上官も威張らない。結構なこと。内地へ早く帰りたい」と。それと現地人のムードが変わった。主客の転倒である。行きはよいよい帰りは恐い。

部隊が移動し始めた。貨車（無蓋）へ三〇人以上乗り込み、小銃二丁で警戒する。武昌へ行くそうだ。悪い事が始まった。民衆が貨車の日本兵目掛けて投石をする。止むを得ず天幕を頭からすっぽり被って石よけにする。悪夢としか言えない。

武昌に抑留中の状況。抑留中の食糧事情は極めて悪い。カマスに入った干柿があった。黄色い黴でいっぱい。何年前の物か分からない。空腹に負けて食う。猛烈な下痢が起る。また朝食がすむと暇にまかせて

荒麦を石で砕く、その砕いた荒麦を食べるとまた下痢。柿と麦の下痢が重なり、瘠せてしまつて死ぬ者が多かつた。

待望の帰国である。武昌から乗船してやれやれと一安心。アメリカのLSTで下関港へ。沖合に二日停泊してその間は消毒検査づめ。山口県仙崎港で白いDDTの粉をふりかけられて上陸。待望の内地上陸だ。戦友と肩をたたき笑顔でお互いの武運長久を祝い、支給品の酒一合で乾杯、小学校へ一泊する。昭和二十一年七月五日のことである。

支給された被服は下は明治四十三年製の黄色の厚い冬の物。上はなくワイシャツ一枚。幾らかの金もくれた。ゴールデンバットを買うと七円。

尾道の駅前広場へゴザを敷いて野営する。夏でも早晩は寒かつた。朝一番の船便で今治へ。上陸してみると港から鉄道の駅舎がよく眺められる。焼夷弾攻撃で町は灰となり、一望千里である。改めて「これはこれは。今後大変なことよ」と覚悟する。仙崎より尾道までの鉄道沿線にある各戦災都市を見た印象と、郷里愛

媛県の今治市を見た印象とは格段の相違があつた。

船から上陸すると、老婦人が一人一人の顔をのぞき込んで確認する。自分の息子の復員を待ち侘びる「岸壁の母、今治版」である。それと分かると気の毒で、自分の母もこうしてくれたのかと気を回し、母の有り難みに心もしめりつばなし。今治駅にも母親たちが数人立っていた。もうやり切れない。一緒の戦友たちも同じ思いで顔を見合わせ、お互いの胸の中を理解できるのは容易なことだつた。内地に帰つてこんな悲劇が待っているとは夢にも思い至らなかつた。

今治駅より満員の車に無理矢理割り込んで乗る。窓から出入りしたり、洗面所、便所もいっぱいすし詰めである。デッキにぶら下がったり、機関車にすがりつく者。現代の五十年後の人々には想像も理解もできぬ交通地獄。加えてスリ、盗難は数え切れぬ。なつかしい故郷の日本は当時はそんな混乱しきつた有様だつた。五十年の歲月とともに忘れてしまつたのか、今振り返つても現在とのギャップの大きさに現実性が欠ける憾みがある。

さて壬生川で真つ先に私一人降りる。次は西條新居浜と次々と降りるのだ。「元気でやれよ。また会おう」と手を振り別れる。駅から自宅まで田圃道を独り歩く。

途中の田の中から「今もたんか。ちよつとわしが走って知らせてやる。そろそろ帰れ」と二カ月早く復員した旧友がいたわってくれた。やつと家族の待つ故郷の自分の生まれた家にたどり着いた。旧友の知らせで妹が母が田より走り帰った兄が次々と駆け寄つて抱き合うようにして、無事の復員を喜んでくれた。有り難い。母は「ヨーヨーモンタカ」と一言。次兄をビルマで戦死で失った母の一日千秋の子を思う親心。山より高く海より深いのであろう。合掌。

結婚は昭和二十三年十月。現在に至るまで二人揃つて元氣。男女女女と一男三女に孫が九人。お寺お宮老人クラブのお世話人など務めております。

元氣で帰れた私として、不幸にも敵弾にあるいは病気に尊い命を散らせて、祖国のために捧げて大陸の土となった戦友の英霊に対して、心よりの冥福を祈るばかりです。

## 陸上勤務

### 第六十二中隊奮戦記

(付・湘桂作戦)

東京都 幅 一雄

―出征した時の場所はどちらですか―

現在住んでいるところです。出征中、昭和二十年三月十日の大空襲で丸焼けになりました。

―家族の構成は、何人でお暮らしでしたか―

家内と子供(女子)二人です。

―出征されてご商売の方は―

人手も物もなく休業です。

―川口の在に疎開したのですね―

そうです。復員して東京の焼跡を確かめ川口へすっ飛びました。二十一年九月から商売を再開しました。

―復員されて、いろいろご活躍ですね―

復員した秋に「八起会」という戦友会を作り、昭和